

プロローグ 幼き日の思い出

「僕のことなんてほっといてよ」

諦めたような寂しい目をした少年は突き放すように言った。

「まあ。それはできないわ。あなたの教育を伯爵家が責任をもって行うってわたしのお父様がお約束したのよ」

これくらいの言葉では全く堪えない。既に千回は繰り返されてきたやり取りなのだ。

「あなたとわたしは幼いころからずっと一緒に育ってきたのよ。まるで姉弟みたいな幼馴染じゃない。放っておけるはずないでしょう」

同じ年で正確にはどちらが先に生まれたかは不明だったが、小柄な少年に対してわたしはいつも姉気どりだった。伯爵家の長女のわたしと預

けられた男の子。

彼が預けられた経緯や出自が気になって両親に何度も聞いたが一度として答えは得られなかった。もしかしたら彼らにも秘匿されている事情があるのかもしれない。名はレオと言ったが、偽名かもしれない。かなり幼い頃から一緒に育てられていた。

わたしの実の弟や妹は年が離れていて、レオとばかり一緒に過ごしていた。

幼い頃から伯爵家の長女として良縁を得て結婚することこそが至上命題と言われ続けて育った身だ。勉学に励んでも、殿方に嫌われるから程々にしなさいと言われてしまう。才能を伸ばすこと、自分の能力で生きていくことに密かに憧れていた。

だからこそ、レオの姉代わりとして彼を立派に育てることに力を注ぎ

込むことにのめり込んだのかもしれない。ただ、そんな生きがいはある日突然失われた。わたしが十二になったときに彼は伯爵家から忽然と姿を消したのだった。

第一章 思わぬ場所での思わぬ再会

どこで間違えてこんなことになったのだろう。鏡に映った自分を見てため息をついた。大きく胸元が開いたドレス。裾は体にぴったりと沿うようなデザインのものだ。腰からお尻、太ももに至るまで体のラインが強調されているようにあらわだ。太ももの途中から深いスリットが入っている。歩くたびに太ももを含め足が丸見えになる。これを着て働くのだ。雇ってくれた酒場で準備されていた。

数か月前まで着ていたドレスに思いを馳せる。パニエをふんだんに仕込み、裾をふんわりと膨らませていた。胸元もフリルが幾層にも重ねられていた。最近の社交界で大流行のデザインだ。令嬢たちがこぞって着ていた。

「わたしもその一員だったのだけど。こんな胸や脚を強調するドレスを着ることになるなんてね」

派手な舞踏会も豪華なドレスもさして好きではなかったが、もう戻らないとなると何となくせつない。

鏡に映る自分の姿は煽情的なドレスを身にまとっている。

「これでお金を稼げるなら、いくらでも着てやるわ」自分を奮い立たせる。何もかもを失った。伯爵家は没落して今や貧乏暮らしなのだ。高齡で世間知らずの父母や幼い弟、妹達が慣れない生活で苦勞している。長子のわたしがこの苦境をなんとかしないといけない。

「あなたがそんな水商売をするなんて」母はそう言って止めようとした。

「お母様、気にしないでくださいな。どうせ没落してしまっただけなら、

伯爵令嬢では体験できない仕事をやってみるのもいいかと思ったんですのよ」

母の罪悪感を軽くするように冗談めかして言った。母は悪くない。自分に正直に振り返ってみると、あえて水商売を選んだとも言えたのかもしれなかった。

振り返ると、没落する前から凋落は始まっていて家計は火の車だった。父母は世間知らずのお人好しで困った人や弱い人に後先考えずに施しをしてしまう。そんな両親が大好きだが、尻ぬぐいはいつもわたしがしていた。

「ねえ、また縁談が来ているわよ。公爵家の長男ですって！」

両親は悪気なく次から次に縁談を持って来た。傾いている家計を一発逆転するには裕福な家との結婚が手っ取り早いから。

もちろんお金目当てだけで娘を結婚させようというわけではなかった。純粹に愛娘の幸せを祈ってくれていた。ついでに家計が潤えばなお良し、といったお気楽な両親だった。

結婚適齢期を迎えたわたしには日ごと縁談がどっさりと持ち込まれた。せっかくの縁談をどんな好条件であつてものらりくらりとかわしていた。

なぜなら——心の奥底で忘れられない思い出があるからだ。初恋と言つてもいいかもしれない。ある日突然消えた幼馴染。

（あの子、何も言わずにいなくなった。なにか事件に巻き込まれたのでなければ良いのだけれど）

ふとした時に思い出す。心の奥底に引っかかり、縁談に積極的になれなかった。

そうやって日々縁談を受け入れずにいたら、ついに父が詐欺にあった。貧しい子供を保護する施設を共同で経営しないかという話に騙された。お人好しの父は無茶苦茶な契約書に署名してしまっていた。減ってきてはいたが残りの財産を身ぐるみ剥がされる形で奪われたのだった。だから、わたしも罪悪感がある。初恋の人なんて忘れて家のために結婚しておけば家族は助かったのかもしれない。

詐欺にはあっても強力な婚家の財力で今みたいな貧しい暮らしに陥らずに済んだ可能性がある。

水商売に従事することは、名誉と評判を重んじる社交界では死も同然だ。縁談も結婚もあり得ない。そんなわたしと結婚したい人が今後に現れるとは思わなかったが、結婚を期待される重荷から解放されたかった。

（わたし、働いてみたかったのよね）

没落前は考えさえもしなかったが、自分で働いてみるというのも興味があった。皮肉にも没落することで元来の願いだった自分の能力で生きていく道に立てたのかもしれない。

そんな矢先に紹介されたのがこの酒場だった。男性客に若い女性が接客をする形態の酒場である。

国内の都市部から地方まで多数存在しており、上流階級の御用達の店から男性庶民の憩いの場まで幅広かった。

わたしが今いるこのお店は客層がいいのが自慢らしい。経営者の口ぶりを思い出す。

「ここは公爵様でさえ臍員にしている店なんだ。雇う女性も特級品さ。ただ綺麗だけじゃなくて、品性と教養が必要だね。とても難しい試験

に合格しないと働かせられないよ。あんた、見かけはそこそただけど、伯爵家の令嬢とのことで試験は免除してやろう。こんなに運がいいことはないぞ。しっかり働いてくれ」

どうにも胡散臭い言い草だった。とは言え、給料の額は確かに破格だった。

働くことを決めた時点で一時金としてまとまったお金を受け取れた。家族が半年は暮らしていける金額で大変ありがたかった。多額のお金が必要ならわたしにはここで働く以外の選択肢はなかったのだった。

「さあ、出陣よ」

覚悟を決めて酒場の控室を出る。化粧や着替えのために共同で使う部屋だ。かつては化粧や着替えは侍女に手伝ってもらっていたために自分でするのは難しかった。けれど慣れなくてはならない。

深呼吸して店内を見渡す。数人の客がおり、無遠慮に胸元と顔を凝視される。明らかに値踏みされている。社交界ではご法度な態度だ。

応接のソファとテーブルが数組あった。それぞれに花の名が付いている。今日のわたしの担当は百合の卓だった。

宝石の鉾山で働いている出稼ぎ労働者と見える男がわたしに声をかける。

「美しい。そして若い。さすが評判の店だけある。さあさあ、まずは乾杯としよう」

すでに数杯飲んでいたようで、男の口からはアルコールの香りがした。経営者の言った通り、客は紳士的な態度のまま小一時間ほど過ごした。

王宮での噂話や諸外国との貿易の話などの会話も弾んだ。ほっとしな

がらわたしは一息ついた。

化粧直しに一旦控室に戻ろうとしていると、店主から声がかかった。

「なんだ、うまくやっているじゃないか」

「はい、なんとか」

「次は、特別なお客様だ。あんたをご指名だ。その専用客室を使え。くれぐれも機嫌を損ねるなよ。言うことを聞かないとか逃げるのは契約違反だからな。その場合、渡した一時金の十倍の金額を払ってもらうことになるぞ」

「えっ！　じゅ、十倍!?　そんな、聞いていません！」

「いやいや、確かにこの契約書に書いてある。しっかり署名しただろう」にやりと口を歪めて笑いながら店主は言った。

慌てて経営者の手元から契約書をひったくった。急いで目を走らせ

る。

なんてこと！ 契約書の下の方に『補足…特別客室内では客の指示にすべて従うこと。拒否すること、従わないことは契約違反となる。その場合は支払い済みの一時金の十倍を賠償金として支払うことに同意する。』と書いてある！

本文よりずっと小さい文字で書いてあるのが確信犯としか思えない！ 騙されたのだ。契約書をよく読まずに騙される。父と同じ轍を踏んでしまった。

怒りで言葉が出ない。店主に対してではなくあまりにも愚かな自分だ。

「さあ、早くいけ。まもなく特別個室に客がお着きだ。今日の客は特に羽振りがいい。全身全霊でご満足いただくのだ」

世間知らずが嫌になる。うまい話などあるわけないのだ。

とは言え、最初の客は紳士的だった。かなりのお金持ちの客ともなれば野蛮なことはしないのではないか。

先ほど接客をしていた大広間の奥の廊下を進み、指定された部屋のドアを開け中に入る。

部屋の大部分の面積を占める、大きな天蓋付きの寝台。バスタブがなんと部屋の中央にあった。

湯上り羽織るためのレースのガウンがかけられている。素肌を隠すためのものではない。素肌を引き立てて見せつけるための代物だった。

どこからどう見ても、この部屋を使う目的は一つだった。個室で会話を楽しむだけなのではと少しだけ期待していたが外れた。

ここは紛れもなく娼館だった。表向きは普通の酒場なのだろう。最初

の接客の時のように飲酒を楽しんで帰る客がほとんどだと思う。

実際に接客中にそのまま帰っていった客を何人か見た。一部の客が、接客している女性を値踏みして気に入ったら指名してこの部屋でことに及ぶのだ。

呆然と立ち尽くしていると、背後から男が入ってきた。長身で隙のない身のこなし。髪には布を巻いていて目元も影になっている。髪を隠していた布を外す。薄汚れた布から暗闇が零れ落ちた。

騙された驚きを超える驚きなど存在しないと思っていた。

そこにいたのは幼馴染のレオだった。最後に会った時から数年が経っていたが一目でわかった。

漆黒の髪と瞳。変わっていたのは背丈だった。わたしより低かったのに、今では見上げるほどに長身だった。先ほどの出稼ぎ労働者と変わら

ない至って簡素な服装だったが、彼自身の美質が損なわれることはなかった。均整のとれた体躯と長身。際立って整った目鼻立ち。彼は秀麗としか言いようがなかった。姉弟のように過ごしたころは気づかなかった。

「レ、レオ。どうしてここに？」驚いて尋ねた。

「きみこそなぜ。伯爵家の令嬢だろう。こんなところにいていいはずがない」

刺すようなレオの視線がちりちりと肌に痛い。こんな服を着ていることを後悔した。貧しくなったことを知られるとしても、没落してから着ている麻のワンピースの方が良かったと思った。

ずっと会いたかった。だけど、こんなところで再会するとは思ってもよらなかった。しかもこんな露出度の高い服装で！

身長が逆転した今、お姉さんぶるのも違う気がした。どう接していいか分からない。本当はなぜ突然いなくなったかが聞きたい。でも聞けない。とりあえずなぜここに来たのか聞いてみることにした。レオが娼館に上客として訪れるなんて信じられない。隔たっていた数年で人格が変わってしまったのだろうか。

「あなた、なぜここに来たの？ 店主が上客と言っていたけど、こういうお店に良く行っているの？」

「そつ、そんなわけないだろう！ 仕事で調査に来ただけだ！」
その場の力関係が一瞬崩れた気がした。レオが焦っている。

「調査で来たことは内密だったんだが……。俺もうかつだった。きみに誤解されなくなかった」

わたしに誤解されたくない。少しだけ胸が高鳴ってしまった。レオは

説明を続ける。

「そもそも娼館は営業許可を王宮に得らなければならない。最近、現王の方針で管理が厳しくなった。弊害として無許可の違法娼館が乱立している」

「全く知らなかったわ。伯爵家にいたころもそんな話は聞かなかった」
両親だけでなくわたしも十分に世間知らずだ。

「運営には組織的な犯罪組織が絡んでいて巧妙に隠されている。人身売買まがいのことも行われていると聞く。なかなか尻尾がつかめないから俺が来た」

「レオは軍属の人なの？」

「まあ、そんなようなものだ。王都からは遠いこういった都市では違法が表に出にくく放置されやすい。内部から探るために調査に来た」

「そうだったの……」

「では、ここの実態を教えてもらおうか」

そういうとレオはわたしの手を掴んだ。

「え!? ちょっと、どうということ!？」

そのまま強い力で手を引かれる。わたしはソファのすぐそばに立っているレオに歩み寄る形になった。ソファにレオが腰掛ける。先に座ったレオの膝の上に跨らされてしまった。

（か、顔が近い!）

対面で抱きつくような姿勢で座っている。立っていたときは身長差から顔は遠かった。今は息がかかりそうだ。

触れ合うお互いの太ももから服で隔てても熱が伝わってくる。

目が合ったほんの一瞬の間の後に、口づけられた。

衝撃に目をぱちぱちしていると間髪入れずにまた口づけられる。味わうように口づけは繰り返されるごとに深くなっていく。

……ちゅ♡……ちゅぱ……ちゅ……。聞かせるようにたてられた水音が興奮を煽る。息はあがっていく。はあはあ♡と肩で息をする。

口づけは挨拶で頬にしかされたことがなかった。気持ちが良くて頭がくらくらする。

そのまま唇をぺろり♡と舐められた。唇以上に濡れていて柔らかい、ぬるぬるとしている。

息をしようとあけた隙間にレオの舌がすかさず侵入してきた。ゾクゾク♡として腰が浮いた。

長いレオの舌がわたしの口の中を犯していく。

じゅる、じゅる♡音を立てて唾液が流れ込んでくる。恥ずかしい。誰

かに品がないと怒られないだろうか。

足の間のその奥がせつない。下着が濡れてきていた。キスで濡れるなんて聞いてない！

レオの目は充血しており、息が荒い。まるでなにかの獣を思わせた。お互い口の周りは涎にまみれている。

レオの手がドレスの胸当ての部分にかけられて降ろされた。スルッ♡とたやすく胸当ての部分は外に反る。体形補正のために嚴重に締め上げるコルセットとはわけが違う。いましめを解かれた胸がいとも簡単にぷるん♡と露出した。

レオは何も言わずシャンデリアに照らされてはつきりと見える丸い乳房を見つめた。

「ふうん、思ったより大きいな」なぜか淡々と言うのが恥ずかしく、耳

が熱くなった。見つめられて、先端が尖ってくる。

思わず両手で隠し、首をすくめた。恥ずかしい。

「だめ、隠さないで。手を降ろして」

恥ずかしくてたまらなかったけれど、特別個室のお客様の命令は絶対という言葉の思い出す。羞恥に震えそうになりながら手を下した。

満足そうにレオは微笑んだ。

「ここは色が薄い」そう言ってわたしの乳首の縁に指先を沿わすようになってた。「ひゃんっ♡」初めての経験に変な声がでてしまった。

そして両手でぶるん♡とした柔らかな乳房を持ち上げるように掴まれた。持ち上げられて、寄せられて、ゆっくりとこね回される。わたし、レオにおっぱいを触られて、揉まれている。胸を揉む行為は揉む方が感触を楽しむものかと思っていたが、揉まれる方が気持ちよくなってしま

うのだ。全然知らなかった。もつと刺激が欲しい。でもそのためには何をしてもらうと良いのかはその方面の知識がないのでわからない。

そう思っていたら右手で乳首をきゅっ♡っ♡とつままれた。

求めていた刺激が急にきて「はあん♡」と声が出た。親指と中指で乳首をつままれ、人差し指の指先と爪でコリコリ♡っ♡と弾かれる。

「ああ……あん♡」恥ずかしい声がでる。胸全体を揉まれるのが一番気持ちいいと思っていたのに、それ以上に快感をもたらし行為があったのだ。左手も乳首を弄りだす。

「あっ♡や、やん♡」触られた瞬間に声がでた。おかしい。苦しいくらいに気持ちがいい。なぜかは分からなかったが左側の方が敏感で感度が高い気がする。気持ちよさが段違いなのだ。

「こっちが感じるんだ？ それじゃあ、こっちを念入りにかわいがらな

いとな」

そういうとまたコリコリ♡クニクニ♡とこねられる。先端は固く完全に尖って立ち上がってしまっていた。

「乳首立ってる、かわいいね」そう言って舌なめずりしたかと思うと、乳輪を超えて深くぱくつと咥えられてしまった。胸をぬるぬる♡と生暖かい舌で舐められる。そのまま舌は先端の尖った乳首に辿り着く。

「あ♡だめ♡舐めたらだめ♡」懸命に首を振っても行為は止まらない。自分から発せられる声が甘くて、嫌がっているというより嬉しがってさえいるように聞こえてそうだと。

「もしかして乳首だけでイける？」聞かれたが何のことだかわからない。何より刺激と快感に必死で頭が回らない。

「わ、わか……わかんない♡……あ、ああ……ああん♡」息は上がり、

汗まみれで整えたはずの髪は乱れていた。

「まあいい」レオはゆっくり立ち上がった。膝に跨っていたわたしはすべり降りる形でその場に立った。

両手首を掴まれる。手が塞がって、汗ばんだおっぱいを隠せない。レオの眼前で乳首はぴんと立ち上がってしまっていた。

頬に口づけられ、唇の少し外側、唇と立て続けに口づけられ、そのまま唇は首筋へ移動する。

（また、胸を舐められる……？）と覚悟なのか期待なのかわからない予感で顔が熱くなる。ところがそのまま壁際に押されるように歩かされた。背中に冷たいものが触れた。壁に掛けられた姿見だった。わたしの背丈よりもずっと高く、幅は両手を広げたくらいある大きなものだ。気が付いたら鏡を背に部屋の壁際まで追いやられていた。掴まれていた手

首を引かれ体が反転する。

「え、何……？　どうするの……？」これからどうなるのか不安で聞いてみるが返答はない。

鏡に手をつかされる。

「か、鏡に触れてしまうと曇ってしまうわ」

後から掃除をする方に申し訳ない、などと埒もないことが浮かぶ。

（レオはどうする気なの……？）

「手を鏡から離してはだめだ」

背後から耳元に囁かれてゾクゾクしてしまう。

命令は絶対。賠償金の金額がよぎる。耳に近づいたレオの顔は遠ざからない。そのままわたしの左耳をちろり♡と舐める。最初は先端で耳朶をチロチロ♡と舐めて、次に耳の裏をベロリ♡と舐め上げる。反対側の

耳は指で弄ばれていた。顎を軽くつかんでわたしの顔を少し左へ傾けると耳の穴に舌が差し込まれた。

じゅ……♡じゅる……じゅる……♡

鼓膜に水音が直接聞こえてくる。手で弄られていた側の耳に指が差し込まれた。外の音を遮断され、いやらしい音が脳に直接響き渡るようだった。耳から顔と手を離れたレオはわたしの腰を後ろに引いた。

「えっ、あ。なに!？」

肩の高さについていた手はそのままに頭が下がり、両手の間の高さになった。耳に集中していて油断していた。おっぱいは重力で下向きに垂れる形だ。普段なら服に支えられ動かないのに、今は身じろぎすることにした♡たぷ♡と揺れてしまう。

腰に当てられていた手はそのままドレスのウエストを締めている組み

紐へ伸びた。しゅるり♡と組み紐の蝶々結びがほどかれてしまった！

このドレスには腰から太ももの中ほどの位置まで組み紐が通されてあった。多少ふくよかでも細身でも多様な体形に合わせられるように紐の締め具合で調節するようになっていた。蝶結びがほどけ、そのまま紐を引かれる。紐はシルシルと簡単にドレスにかけられたホールを抜けてしまった。(こんな、簡単に抜けるなんて……！) 恥ずかしくて泣きそうになる。

「こういう服は脱がせやすいように作られているんだ」

見透かしたようにそう言って反対側の組み紐もあっさりほどいてしまう。両方の組み紐が抜かれたドレスはずり下げられた胸当ての下の部分の布地でかろうじて前身頃と後身頃をつないでいた。鏡に手をつかされたまま、お尻を突き出す姿勢にされる。前身頃は胸より下は床へ落ちて

いる。

後身頃はかなり頼りなくなつたがそのままの位置にあつた。その後身頃をあつさりと掴まれめぐり上げられた。

腰辺りまでまくり上げられ、下着をつけたお尻があらわになる。このドレス用に作られたという特別な下着をつけさせられていた。レースでできていて布の面積は極端に小さい。ドレスに響かないようにお尻の割れ目にそつて細いレースが沿うものだ。

「いやらしいな、こんな下着をつけているのか」レオが舌なめずりするように言った。

「ち、ちが、恥ずかしい、見ないで」

本当なら捲られたドレスを引っ張り下着とお尻を隠したかった。

煽情が目的に作られた下着だった。最初からこんな目に合うのは決ま

っていたのだ。考えてみると露出度の高いドレスも下着も違約金もおか
しかった。気づかないわたしはどうしようもない愚か者だ。

「ひゃっ♡」

尻肉に両手が触れた。ひんやりしてすべすべの手のひらに触られてぞ
わぞわ♡する。次の瞬間、むぎゅ♡っと掴まれて強く揉まれる。

ぎゅっと唇を噛みしめて、声が出ないように我慢した。揉みしだいて
いた動きが止まる。掴まれた尻朶がぐいっと左右に開かれた。

「濡れて染みになってる」

とろり♡とした蜜で濡れ細った布地を指でなられる。

「ほら、ここだよ」

膣孔からじんわりと染みてきていた愛液が下着を濡らしていた。布地
が愛液を吸って色が変わった部分に指を押し込むように前後に指を揺ら

しながら触られる。「や、やん♡」我慢していた声がでてしまう。

その時点では染みはまだ小さかった。とろり♡とした体液はどんどん溢れて染みを広げていった。絶え間なく変化をつけて責められる。布越しの割れ目にそって優しく指が這わされる。軽くサワサワ♡されるとくすぐったくて腰をモジモジと振ってしまう。

「感じてるのか、いやらしいな」

布越しに割れ目に触れたまま何度も何度も指を往復される。だんだん染みは広がった。面積のわずかな布地は水分で割れ目にびっとりと張り付いて、膣ヒダの形がはつきりとわかってしまう。蜜汁は今や下着全体を濡らすほどだった。レオの指の動きは止まらない。

何か、来る。ゾワゾワして。

「あっ、ああっ♡ 怖い、なに!？」

初めての感覚が雷のように駆け抜けていった。膾がヒクヒク♡している。は♡は♡と息が上がる。膾が動くなんて初めてだった。

「は♡は♡なに？　これえ？♡」

目からは涙が滲んでいた。足はガクガクして鏡に縋りつかないと立てられない。できれば膝をついてしまいたいくらい辛い。

「イッたのか」

「いった？　なに？　何なの？」

「俺の指でイカされたんだろ」

「わたし、こんな風になったのはじめてで」

快感と驚きと恥ずかしさで訳が分からない。レオは予想外の涙に虚を突かれたようだ。

「何を言っている。この店でずっと客をとっているんだろ」

「わ、わたし、こ……はあ♡あ♡こ……ここに來たのも、働いたのも今日が初めてだもの」

「はじめて!?　ここですつと働いていたのかと……」

「ち、ちがうわ、さっきまで普通の給仕で、個室で会ったのはあなたが最初だもの……」

「俺はきみがここでもうたくさんさんの客を取っていて、それなら俺が触れてもたくさんこなす客の一人なのだと思った。……すまなかつた」そう言つてレオは脱ぎ捨てて床に落ちていた自分のマントをわたしの肩にかけた。

裸の肌が見えないようにすっぽりと包んで、その上から抱きしめた。

「予定変更だ、行くぞ」

そう言つて肩を抱いたまま歩き出した。特別客室の音が漏れないよう

に作られた分厚いドアを勢いよくあける。

辺りを見回し、一呼吸すると叫んだ。

「ここにいる全員動くな。この店で違法な人身売買が行われている証拠を得た」

レオのよく通る声が店内に響き渡った。

「国王陛下の名代で王位継承順位一位のレナード・フォン・オスカーだ。諸州の治安維持のため国王軍の持つ捜査権限を委譲されている」

レナード王子！ その名を知らない人間はこの国の民ではないだろう。

違法な娼館を調査に来た軍関係者くらいに思っていた。急に姿を消したレオが、まさか王子だったなんて。確かに王子は黒髪で黒い瞳とは聞いていたが結びつくはずがなかった。

それから上から下の大騒ぎとなった。逃げようとする客、泣き出す女性もいた。

どこからともなく現れた彼の十数人の部下が支配人と客を取り押さえ、女性たちを保護し連行する。

百人規模となり、全員が王都へ移送されることとなった。わたしはどさくさに紛れて家族の元へ帰ろうとした。しかし軍人の一人に見つかってしまった。結局、王宮へ向かう馬車に乗っている。

レオは現場の指揮で忙しいらしく姿が見えない。

働き始めて数時間、レオから脱がされて体を触られたとは言え他の女性に比べると被害は軽い。騙されて体を売らされてしまった女性たちのことを考えると胸が痛んだ。

これからどうなってしまうのだろうか。

第二章 利害に彩られた初夜

王都へついたわたしはとびきり豪華な部屋に通された。調度品の一つが上等で品が良い。驚くべきことに身の回りの世話をしてくれる侍女も二名ほど付けられた。参考人の一人にしては待遇が良すぎる。レオの、王子の幼馴染ゆえの特別扱いなのか、連れてこられた女性たち全員にこれほどの部屋を用意できるほど王族が豊かなのかは分からなかった。

一週間が過ぎたが、聴取は行われなかった。レオもこの部屋を訪ねることはなかった。王子なのだから当然だ。国王の次にこの国で尊い地位の人。没落して娼婦になった（娼婦になったつもりはなかったが事実としてはそう）幼馴染に会いに来る時間も必要も微塵もない。レナード王

子と呼ばなければならぬがどうしても慣れない。

侍女の一人は年頃も近くここでの生活で気安く話せる存在になっていた。彼女も元は名家の出とのことだった。王宮では使用人に至るまで身元の確かな者しか雇われないのだ。わたしも最初からまっとうにこういった職を探すべきだった。

「顔色がすぐれませんね、お休みになりますか？」

「いいえ、ありがとう。やっぱり両親や弟達や妹達のことを気になってしまつて」彼女には一通りの事情を説明していた。騙されて娼館で働いていたなんてことは本来なら話しにくいんだけど、最初の段階で城内に知れ渡ってしまった。「人それぞれ事情がありますから」と言つて蔑んだりせずに接してくれた。彼女もきつと苦勞をしてきたのだろう。

「そうですね、あ、一つ良い方法があります」

「え？ 何かしら？ わたしは何も思いつかなくて」

方法があるなら知りたかった。とは言え今度こそ慎重にならなければ。またうまい話に騙されないように。

「なんとかしてレナード王子と一晚を共にするのです」 ともんでもない提案だ！

「ええー！ 何をいいだすの!？」

「いいですか、レナード王子は大変まじめな、まじめすぎる方です」 若干の含みを感じる言い方をする。

「本来なら、お妃どころか側室を複数持っていてもおよいお立場です」 お妃や側室という言葉にかすかに胸が痛む。わたしには程遠い世界なのだ。

「政治や軍事にばかりにご熱心で。ご正室のお后どころか側室の方もお

られません」うっかり、喜びそうになる。レオが硬派であつてもなくてもわたしには関係なんだってば。畏れ多すぎる。

「そこで、王子と一度でいいのでこの城内で夜を共にするとどうなると思います？」

「よ、夜を共に!？」さすがに想像の範囲を超えた話に大きな声をだしてしまった。彼女は気にした様子もなく続ける。

「そうです。一夜を共にして、それが城中に広まると？」

そんなこと起こるはずがないけれど、とりあえず会話を続ける。

「ただでさえ没落して持参金も準備できないのに、王子と関係を持ったことが広まればわたしの縁談は絶望的ね」

娼館で働いたことは一旦置いておいて、言ってみる。

「逆ですよ、逆。堅物の王子が手を付けたなんて、噂の的ですよ。どん

な女性なんだろう？って価値が上がるんです。そして王家では昔から手柄を立てた家臣や有力な貴族に手を付けた女性を下げ渡すこともあるんですよ」

さすが酸いも甘いも噛分けてきた女性は違う。わたしが世間知らず過ぎるだけかもしれないけれど。

「全く知らなかったわ。わたしの家は貴族とは言っても地方の伯爵家にすぎず……そういった中央の文化や風習には疎くて」

令嬢には不名誉な噂はご法度であり、純潔でなければ縁談が来ないと言いつけられて育ってきた。地方と中央ではここまで文化が違うとは。

「そうでしょうとも。一度でも王子のお手が付けば、箔が付いて有力な貴族との縁談がいくつも舞い込むでしょう。幼馴染という利点を使って何とか頑張ってみては」

言っていることはぶっ飛んでいるが、完全に善意から言ってくれているので無下にはできない。

「うーん、どうかしらね、王子はわたしのたくらみなど見破ると思うけれど……」もごもごと会話を切り上げた。

そのままの流れで侍女の手を借りて湯を使った。

精油を数滴落とした豪華なバスタブにはられた適温のお湯につかる。じんわりと熱が伝わり手足のこわばりが緩んでいく。

湯船から出ると侍女から冷たい薔薇水を受け取る。飲んでいる間にも侍女は手際よく次々と手入れを進めていく。

髪を丁寧に梳かされ、湯上りの肌には花の香りのこっくりとした香油が塗り込まれる。全ての就寝の支度が済み、侍女たちは下がっていった。

没落する前はこのような手入れをされるのが日常だったが、没落した身では分不相応に感じている。

机の上の封筒を取り上げた。王宮に来て、数日後に両親に送った手紙に対する返事だった。

今日の午前中に届いて一度目を通していたが、再度じっくり読みたかった。

家族は無事で過ごしているらしい、わたしのことを心配していたが王宮にいと聞いて驚いたがひとまず安心してくれたとのことだった。

母の字を見て、張りつめていた気持ちがほどけた。その日はいつになく深く眠りに落ちた。

物音がして目が覚めた。警備が厳重な王家の城の中だ。この部屋で寝食を行うようになって以来不審な物音がしたことなどなかった。

夜着のガウンを手繰り寄せ羽織ろうとする。侍女を呼ぶべきだろうか。彼女たちも休んでいるはずで、できるなら仕事を増やしたくない。

満月で外から月明かりが差し込んでいた。わずかな光に人影が浮かんだ。

「レ、レナード王子？　なぜこちらにおられるのですか……？」少し言
いよどんだのはレオと言いかけたからだ。

夜の海みたいな深い黒の瞳がわたしを射抜く。レオはゆっくりと歩み
寄り寝台のすぐそばまで来ていた。

「きみの純潔を他の男にやるつもりはない。ここで俺に抱かれろ」
とんでもないことを言い出した。

「とは言え、俺は嫌がる女性を無理やり抱く趣味はない。きみが決めて

いい。嫌ならでていく。別に後から咎めたりしない」

やっと理解した。レオはわたしを助けてくれようとしているのだ。幼い頃を過ごした伯爵家が没落したままに見捨てられないのだ。

ぶっきらぼうに見えて優しいのは変わっていないのかもしれない。

侍女が言っていた通りに一度関係を持てば縁談が持ち上がる。直接的な金銭援助はできない。没落した貴族へ肩入れしたと公になれば、別の貴族達から不信を買う。王子の立場は難しく、有力貴族の力関係には細やかに気を遣う必要がある。直接的な金銭援助はできないのだ。

ただ、それはこの提案が明らかに伯爵家の援助のための手段でしかないということを示していた。

ずるい、と思った。

レオはわたしのことは好きではない。一度関係を持った後にわたしが

誰かと結婚しても構わないのだ。

戯れでも、一度きりでも利害でなく彼の本心から触れたいと思っ
てほしいと思うのは存外の望みだろうか。

わたしはレオのことが好きなのだった。

意志の強そうな漆黒の瞳。本当は優しいのに不器用な不愛想なところ。背は伸びて声は低くなっていた。

容姿は成長して変わってはいたが面影もあり、懐かしさと愛しさが募る。

息を吸って、吐く。その瞳を見つめて言った。

「わかりました。わたしを抱いてください」

一度だけ。今日のこの夜を思い出にしよう。

自分から持ち掛けた話とは言え、わたしが承諾したのが意外だったの

かレオは少し驚きの表情を浮かべたように見えた。

「そうか、潔くて良い。きみは昔からそうだったな」

懐かしそうにレオは目を細めた。さらに一步寝台に歩み寄りわたしの手首を取った。

再会した時に裸を見られて触られてしまっていた。

だとしても、それ以上の行為が始まる……と思うと体がカッと熱くなる。

天蓋の張られた豪華な寝台の方へレオがわたしを伴い歩いていく。

促されて横並びに寝台に座る。

顔に掛かった髪がかき分けられる。そのまま大きな手がわたしの頬に優しく触れた。

頬でもおでこでもなく唇は真っ直ぐに唇へ向かい、あわされた。口づ

けは繰り返し繰り返し降りるように行われた。

回数を重ねるごとに長く深くなっていく。レオの口づけは頭が蕩けてしまいうくらい官能的だった。

緩急をつけてせめられる。気持ちよくて、夢中になっていたら息を吸うのを忘れていた。

吸おうとして開けた唇の隙間にすかさず熱くて長くてヌルヌル♡とした舌が差し込まれた。

長い舌はわたしの舌を見つけると逃がさないように絡めてくる。

ちゅう……ちゅぱぁ♡れろ……れろ♡……ちゅ、ちゅ♡

気持ちいいのに気を取られて唇の端から混ざり合った二人の唾液がたり♡と垂れた。

その唾液も舐めとられて、唾液を舐め絡めた舌はわたしの口内に戻っ

てくる。

夢中で口づけに応じていると、気づかぬうちに伸びていた手が下着越しに割れ目をなぞった。

「ひゃっ♡!?」思わずビクンと首をすくめる。

「濡れてる、口づけで感じたのか。かわいいな」

「い、いわないでください」

涙目になりながらも自分のおまんこがジュン♡と疼いているのが分かる。口づけがあまりに気持ちよすぎる。

「こっちも触ってほしいんだろう？」

ツーっ♡と再度割れ目をなぞられた。

知られている。おまんこを触って欲しくてうずうずしているのがバレている。

あまりの恥ずかしさに顔に血がのぼった。

「ち♡ちがいます、そんなんじゃ、わたし、ないんです……♡」

必死に否定するも言葉が乱れて感じているのが丸わかりだ。

「見え透いた嘘はつかなくていい、クリをこうやって欲しいんだろ？」
そう言っただけで布越しに爪で突起をカリカリ♡って引っかかれた。何度も何度も強弱を変えて引っかかれる。

カリッ♡カリカリカリカリ……♡カリカリ♡

引っかくだけでなくて指の腹で押されて、揉まれる。

トントン……♡キュッ♡キュッ♡

引っかかれるほどに肉粒はぷっくりといやらしく勃起していく。

「膨らんできたな、プニプニと勃起してる、気持ちよくなってもらえて嬉しい」

クリを弄られて勃起させている様子を実況されると羞恥の気持ちさがさらに高まった。

「さあ、きみのクリトリスはどんな色と形かな？」

「あっ♡だめえっ♡見ないでくださいっ♡」

「そういうお願いは聞けないな、本当は見てほしいんだろ、本心の方を叶えてあげるよ」

見てほしいなんて少しも思っていないのに聞き入れてもらえない。カリカリ♡と引っかかれて可愛がられてぷっくり勃起したクリトリスを見られてしまう。

下着はたやすく取り去られた。

レオの彫刻みたいに端正な顔の面前にいやらしく腫れてテカテカした肉粒がさらけ出された。

「甘酸っぱい、いやらしい匂いがする」

感じきって愛液をたくさん溢れさせたおまんこから雌の匂いが漂っていた。布越しに散々かわいがられたクリトリスは敏感になっている。直接接触られたらどうなってしまうのだろう。

「すごい、ぷっくりしてる。触って欲しそうだ」

「そ、そんなことは……♡」

涙を堪えながら否定しようとするも無駄だった。

「いいから、気持ちよくしてあげるから」

肉粒に指が這わされた。

「あっ♡」指が触れただけで声がでる。どこを触られても気持ちいいけれど、ここは特別だった。クリの快感は段違いみたいだ。膣全体にじわじわ気持ちよさが広がって膣奥がきゅん♡と反応してしまう。

コリコリ♡クリクリ♡きゅっ♡きゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡

突起への愛撫は止まらない。愛液の水音も響いている。最初は気持ちいいなんてふんわり思ってたけれど、爆発してしまうような、なにか恐ろしい感覚が来ていて訳が分からなくなってきた。

「あっ♡あん♡だめ、こ、怖い……」

「怖くないよ、俺に身を任せてくれればいい」

そういいながらレオの手の卑猥な動きは止まらない。わたしの反応を見て優しく撫でまわしたり、きゅっ♡つつまんだり。ふっ♡ふっ♡つて短く息を吐いて、気をそらそうとするけどだめだ。

「あっ♡あっ♡あんっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あんっ♡あんっ♡」

気持ちよすぎて我を失ってしまふ。下品な声が止められない。すぐ近くまで快感がせり上がって来ている。膣壁が何かを求めてニユルニユル♡

動いている。もう、飲まれそう。

「あっ♡ あっ♡ んんっくくくくくく♡」

快感が走り抜けた。再会した時と同じあの感覚。はあはあ♡と一気に息が上がってしまった。

「上手にイケたな」レオは満足げだ。そういうと、ベルトを緩めた。勢いよく、ボロンツと怒張が飛び出してきた。生まれて初めて見る大人の男性のそれ。美しい顔に不似合いなグロテスクなモノを凝視してしまう。

「ふ、これに興味があるのか。触ってみる？」

「そ、そんな、いいです」

遠慮するも手を掴まれて触らされてしまう。

「きれいな手だ」

こんな状況でなかったらとても嬉しいのだけど。重力に逆らってお腹まで反っている剛直を人差し指と中指でそっと撫でてみる。熱くてツルツルした触感。先端から、露が滴ってヌルヌル♡している。他の人を見たことはないが、それでもこれは絶対に大きいと分かる。

「ほらもっと、しっかり触って」

そう言って手の上から包み込まれるように手を添えられる。ゆっくりと上下に扱く動き。

「うっ」レオが軽く呻く。眉間に皺を寄せて、快感に耐える表情は色気があって見つめてしまう。

「気持ちいいよ、一緒に触ろう」

わたしの手に添えていた彼の手がおまんこへ向かう。お互いを絶頂に導くために触りあう。これ以上達してしまうのが怖いから、先にレオに

達して欲しい。

ヌルヌル♡ニユクニユク♡ヌチャッ♡

お互いの大事なところが卑猥な音を鳴らす。

さっきまでクリを触っていたレオの指がついに秘唇を割ってナカへ侵入してきた。自分でさえ触ったことのない場所を暴かれるのが怖い。

「大丈夫、ゆっくり解すから。力抜いて」

「は、はい……」とりあえず、頷くしかできない。

くちゅっ……♡と水音を鳴らして、人差し指がゆっくり根元まで差し込まれた。硬い異物が侵入してきている。はつきりとした違和感がある。ナカを探るようにゆっくりとレオの指が動き始める。レオの左手が胸のふくらみへ伸びる。掴まれて、指先がむちっ♡と弾力のある乳肉に食い込む。優しい膣内の指の動きと荒々しく胸を揉む動きが同時に行

われる。乳の下肉をたぶんたぶん♡と揺らしていた指が先端の突起をキ
ュッ♡と強くつまむ。

「あっ♡」声が漏れる。ダメだ。やっぱりわたし、ここが弱い。親指と
人差し指でつままれて擦り合わせるようにコリコリ♡って強めの刺激が
気持ち良くて。感じてるのを見抜かれたように、人差し指の爪の先で硬
くなった乳首をコリコリ♡コリコリ♡って弾かれる。乳首が気持ちよく
って、膣から蜜液が溢れてきた。挿入された指を伝って、膣の外の手ま
で濡らしていた。愛液が潤滑を助け、膣への違和感や痛みを和らげた。
時を見計らったように挿入された指が動き出す。

ぬちゃっ♡ぴちゃっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡って卑猥な水音が耳まで
犯す。往復することに快感が積み上がっていくようだ。わたしの方は途
中まで夢中でレオの牡莖を握って、擦っていた。快感でそれどころでは

なくて手を放してしまった。

「もう一本入れるね」

「へ!?♡」惚けていて間抜けな声を出してしまう。人差し指に続いて中指がヌルヌル♡に濡れた膣壺へ差し込まれた。

「二本も咥え込んでいる。きみって処女なのにあんなにえっちだな」

そう言っただけで、二本の指でぐちゃぐちゃ♡とかき混ぜる。愛液で彼の指はふやけているのではないか。それくらい長い間、指で膣内を擦られている。

「さて、三本目だ」

「やっ♡ 三本は無理っ♡……」

男性の指が三本も入るはずがない。そう思っていたのに、慣らされて広げられて、愛液で潤ったその場所はいとも簡単に三本の指をくぱあッ

♡って飲み込んでしまった。

「ほら入った。むしろ嬉しそうに咥え込んでるけど」

恥ずかしい。でも確かに膣壁が指に絡みつくように収縮している。鈍感なはずの膣も彼の根気強い刺激でじんわりとした快感が広がっている。乳首やクリも執拗に愛撫されながら、三本の指で膣内をトントン♡こすこす♡ぬちゃぬちゃ♡って擦られる。刺激はどんどん強くなり快感も強くなる。

「やつ♡ああん♡あつ♡ううつ♡ううつ♡」喘ぎ声が止まらない。口を閉じることすら忘れて口角から涎が垂れる。

もう我慢できない。指の刺激もいいけれど、怒張を早く挿れてほしい。奥がキュンキュン♡する。指の届かないところまで突いてほしい。生理的な涙がポロポロと溢れた。